



全米クイーンズ2連覇!

日本女子プロボウリング界 史上初の快挙を遂げた 杉本勝子プロ

杉本勝子さんプロフィール

1945年6月25日鳥取県倉吉市生まれ。倉吉西中学、倉吉西高校時代はバスケットボールのセンタープレーヤー、キャプテンとして活躍。その後、東レ瀬田に入り6年半プレーした。本来のスポーツ好きでバスケット引退後は、寿命の長いスポーツとボウリングを始め、女子プロ第4期生となる。現在A MF専属プロ。世界選手権ともいうべき全米クイーンズトーナメントで2年連続優勝。世界の注目を浴びた。

日本の女子プロボウリング界でも、世界二連覇は初めてですね。

ええ。ボウリングを始めたころは「日本一」になろうと心に決めていたんですが、気がついてみたら世界一になって、二連覇もしちゃってました。

ボウリングを始められる前は、バスケットボールをやっていたらと聞いていますか。

はい、中学、高校、実業団と合計12年半、25歳までやってました。

その頃の戦績は。

だめでした。中学、高校時代は県内では常に優勝してましたが、県外に一步出るとすぐ負けちゃう。それが悔しくて東レにも進んだわけです。

東レでは。

今の日本リーグや実業団リーグが組織化されたころでしたから、うちのチームも何とかリーグ入りと、台湾遠征にまで出かけた。一生懸命やってはいましたが、日本一にはなれませんでした。

それでボウリングを。

ええ、バスケットをやめて半年くらいお料理を習ったり、編み物をしてたりしてみましたが、これがまた、まったくダメで。私は結婚は向かないと思っていたわけです。やっぱりスポーツをやってみたいと思っただけです。ところが年齢が年々進んでバスケットは戻れないし、それじゃ、いっそのことプロにと決心しました。

プロスポーツの中からボウリングを選んだわけは。

最初はゴルフをやってみたんですが、「こりや時間がかかるな」というのが実感で。ボウリングの方は、実際に投げてみると、みるみるスコアが上がっ

たものですから、決心しました。

バスケットをやっていたということ、今のボウリングには何かプラスになりましたか。

はい、まずひとつには、毎日の練習をちっとも怠惰に思わなかったことですね。バスケットの時なんか、1年に2、3回しかない公式戦を目指して、毎日シュート練習を欠かさずやりましたから。勝とうと思っただけで練習するのが当たり前の認識を持っていられたというの、とても助かりました。

二つめは、やはり基礎体力です。私は腕の力がないのですが、バスケットで鍛えた足腰がその分をカバーしてくれました。

個人プレーとチームプレーと両方経験して何か違いを感じましたか。

個人プレーの方が、もうはるかに楽です。自分のミスはすべて自分の負けになるし、自分が頑張れば自分の勝利につながるんです。でもチームプレーでは、全く違う。自分だけが頑張っても勝てないし、自分ひとりのミスがチームの負けになっちゃう。そういう点で、バスケットの時は思いついてできないというか、畏縮しちゃった面があったようなんです。

その辺で、コーチの存在価値が重要になってくると思うんですが。

本当ですね。チームプレーの場合には、チーム全員の、個人的な資質を十二分に引き出してあげられる人でないといけません。一方が生きてても、他の方が死んじやええ、結果としてはほとんど負けのケースが多いんじゃないかと思えます。

その点、個人プレーとチームプレーは全然違うと思いませんか。

女子のコーチというものについてどういう意見をお持ちですか。

ボウリングにしても、ゴルフにしても、ほとんどの指導者が男性です。体格、体力ともに差がありますから、男子選手養成向きの男性コーチじゃだめだと思います。でも相手が男性ゆえに、同性以上に気を遣い、教え子を必死に理解しようという人もいますから、どっちがいいともいえません。

ところで、ボウリング界では賞金等に男女の格差がありますか。

それが幸いなことに、ボウリングの場合は昨年度のトーナメント数、賞金総額を見ても、女子の方が上なんです。でもアメリカなんかを見ても、男子の方が発展しないと女子の質も人気も頭打ちになっちゃうことが多いみたいです。

ところで、ざっくりばらんな話ですが、プロボウラーという職業で、今満足した収入を得られていますか。

ええ、今のところは。でもやはり勝てない時は賞金がありませんから苦しいですね。

他のプロスポーツに比べ、ボウリングの賞金総額は少ないようですが。

そうですね。私も何とかボウリングのイメージアップをはかって、スポンサーのお役に立って、賞金を上げて欲しいと思っただけなんです。でも、こういうことは私ひとりじゃ、どうしようもなくて。今後の課題ですね。

最後に、これからの目標を。

日本一、世界一という自分の夢を達成したので、目標といわれると困っちゃうんですが、あえて、かなわぬ夢を二つ。ひとつは世界三連覇、そして年間の賞金総額を一千万円にすることです。

(昭和56年度賞金ランキング1位、六二五万六千五百円)